

令和5年度 学校評価書

令和6年3月1日

福生市教育委員会 殿

福生市立福生第一中学校
校長 金子 敏治 印

1 今年度の学校の重点的な取組

(1) 学力向上

- ・主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力の定着を図るために、校内研修においてICT機器を効果的に取り入れた授業改善に取り組む。
- ・授業における学習支援や放課後等の補習の充実を図るとともに、タブレット端末のドリルを活用することにより、学習のつまづきを解消し基礎学力の向上を目指す。
- ・C4thや電子黒板等についてのICT活用研修会を実施するとともに、ICT活用上困った時の相談体制の確立を図る。

(2) 健全育成（道徳教育、生活指導・進路指導、特別活動）

- ・生命尊重の心、思いやりと感謝の心等を重点に配列した「考え・議論する」特別の教科道徳の授業実践を軸として、教育活動全体を通して豊かな人間性を育成する。
- ・いじめは絶対に許さないという共通認識のもと、未然防止、早期発見、早期対応等、学校いじめ対策委員会を毎週開催し、組織的対応及び関係機関との連携を図る。
- ・不登校の解消に向けて、不登校対策推進委員会を中心にスクールカウンセラーや関係諸機関との連携を緊密に図り、個別支援カルテを活用しながら、個に応じたきめ細かい対応を行う。
- ・生徒に考えさせ、責任をもって行動させる指導、配慮のある指導を重視し、挨拶、身だしなみ、時間厳守等の基本的な生活習慣を身に付けさせる。
- ・3年間を見通した系統的なキャリア教育を推進し、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育成する。

(3) 特色ある学校づくり

- ・生徒の主体性及び自治能力の育成を中核とした学級活動、生徒会活動、学校行事の企画・運営を行う。
- ・不登校特例校7組の円滑な運営と教育活動の充実及び情報発信に努める。

(4) 健康・体力づくり

- ・体育健康教育推進校としての様々な取組を通じて、学校教育全体でスポーツへの興味・関心を高めたり、運動への親しみをもたせたりすることで生徒の体力向上を図る。

(5) 学校運営（特別支援教育を含む）

- ・ICT機器を活用した業務の効率化、会議時間の短縮を進め、計画的なOJT及び校内研修を行う。また、東京都教職員研修センターの研修を活用し教員の指導力向上を図る。
- ・校内支援委員会において支援の必要な生徒の把握と関係機関等と連携した指導を推進する。
- ・特別支援学級8組・9組との生徒間交流及び、教員間の出前授業等、支援・協力体制の構築

を図り、インクルーシブ教育を推進する。

(6) 家庭・地域等との連携（信頼される学校）

- ・「ふっさ文化の杜委員会」（CS）を核とした地域関係機関との連携により、地域防災活動、学校だよりの回覧、ボランティア活動、職業講話講師依頼等を行い、より一層の信頼関係を構築する。
- ・一中学区の三校交流会や「ふっさっ子スタンダード」の活用等を通して、二小、三小と連携を図り、学力向上・生活指導・特別支援教育等に関する継続的な指導の実践を推進する。

2 自己評価の総括

(1) 学力向上

授業改善を推進するために、「授業改善推進プラン」を各教科で9月に作成した。また、生徒に教育活動アンケートと授業評価アンケート（2回）を実施した。アンケート設問「授業は丁寧で分かりやすい」、「集中して学習に取り組むことができる」、「授業の目標を理解して学習することができる」の肯定的回答率は、いずれも90%以上の結果であった。その一方、「分からないことを質問して解決している」の設問は60.3%であり、昨年度と同様に他の質問項目と比べ肯定的回答率が低いため、生徒が授業内で課題を設定し、生徒同士が学び合う中で解決していく機会を設定するなど、主体的に学習に取り組む態度の育成が重要である。

補充的な学習については、放課後学習教室「学びの杜」において、教員免許資格を有する外部人材を配置し生徒が質問できる体制を整備している。開催についてT e a m sを活用して呼び掛けた結果、年間延べ人数150名以上の生徒が参加した。

全国学力学習状況調査の結果は、昨年度より下降傾向にあるため、基礎・基本の確かな定着、効果的な補充的な学習に取り組む必要がある。

今年度は、授業や校務において、ICT活用を一層進めるための研修を実施した。また、進路指導部のICT教育推進委員会を中心に、教員がICT活用に際して支援を受けられる体制づくりに取り組んだ。その結果、全教員が授業における教材提示や課題の配布・回収を行うことができるようになった。また、同調査の生徒質問紙回答結果から「授業中にPC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用していますか」について「週3回以上、ほぼ毎日」と回答した生徒は82.0%（全国平均より20.9ポイント増、都平均より16.1ポイント増）であり、一人1台端末を日常的に活用できていると考えられる。タブレット端末によるドリルの活用については、ミライシード活用状況結果から、まだまだ不十分である。今後、ICT機器を引き続き文房具のように活用するとともに、主体的・対話的な学びに効果的に活用できるよう研修、授業改善を進めていく。

(2) 健全育成（道徳教育、生活指導・進路指導、特別活動）

道徳教育については、道徳教育推進教師を中心に「道徳科校内研修ノート」を活用した研修と授業改善に取り組むとともに、各教科との関連について整理した別葉を作成するなど道徳教育の充実を図った。今年度も学級担任だけでなく学年の全教員で道徳のローテーション授業を行った。道徳授業地区公開講座では、学年ごとにテーマを統一し、教員で指導内容について協議した。実際の授業では、ICT教材を効果的に活用することで、生徒が道徳的価値を自

分事として捉え、考えられるように進めた。これらの取組を通して、教員の道徳指導力の向上を推進することができた。今後の課題として、保護者の参加者数を増やす工夫が挙げられる。

人権教育については、外部人材を講師として招聘し、性の多様性についての講演会を開催した。生徒は、自分とは違った個性や立場を尊重することや、寛容の心をもって他と接することの大切さを学ぶことができた。今後も教育活動のあらゆる場面で、様々な人権課題について学習する機会を設けていく。

生活指導については、挨拶や身だしなみ、時間厳守など基本的な生活習慣を身に付けさせる指導を重視した結果、生徒教育活動アンケートにおいて「服装、時間等学校のきまりを守っている」と回答した生徒が、95.9%（昨年より 2.5 ポイント増）となり、ほとんどの生徒が、基本的な生活習慣の大切さを意識して行動している。一方、生活のきまりについては、「生徒指導提要」にあるように、生徒自身が考える指導を通して自発的・主体的な生徒を育てることが課題である。今後、生徒会を中心に考える取組も充実させていく。

いじめ問題については、毎週のいじめ対策委員会、生活指導部会等による情報交換・情報共有を基に、組織的に早期発見、早期対応、継続指導に努めている。また、年間欠席日数30日以上の不登校生徒数については微増傾向であるが、現在、外部機関等との関わりで登校ができるようになった生徒もいるため、今後も、生徒の「居場所づくり」や「絆づくり」を進め、不登校生徒との関わりを大切にしていく。

進路指導については、職業講話、職場体験、面接練習などで「ふっさ文化の杜委員会」を介して地域の多くの方々に御協力いただいた。社会で働いている方々から職業について直接話を聞く機会としての職業講話、実際に仕事を体験する職場体験、3年次には進路学習の一環として面接練習をしていただいた。今後、進路学習における各活動のねらいを明確にし、3年間の系統的なキャリア教育を推進し、進路指導のより一層の充実を図っていく。

(3) 特色ある学校づくり

学級活動や行事等について「生徒主体」を全教職員の共通認識として実践したことにより、一定の成果が見られた。同アンケートにおいて「学校行事（合唱コンクールや体育祭等）に積極的に参加し、達成感を得ている」と肯定的に回答した生徒の割合が90.7%（昨年より 2.8 ポイント増）であった。生徒は、諸活動に前向きに取り組んでいる。来年度は生徒個々の主体性を高める実践とリーダーの育成を継続していく。

(4) 健康・体力づくり

令和4・5年度の2年間、東京都「体育健康教育推進校」の指定を受け、研究主題「生涯にわたって主体的に体力の向上を目指し、健康な生活を送ろうとする生徒の育成」を設定し研究を進め、2月に研究発表会を行った。保健体育科の授業では、外部講師を招いて男女共修でアルティメットを行うことで、健康的な体づくりの必要性や生涯スポーツへの興味・関心を高めることができた。今後、日常生活における運動習慣の更なる定着を図るための取組を進めていく。

(5) 学校運営（特別支援教育を含む）

職員会、運営委員会をはじめ、ほとんどの会議において、提案内容を事前にデータ入力してし、会議後は結果を記録して共有している。また、職員朝礼等もC4 t hやT e a m sを活用

して資料配布することにより時間短縮を図ったことが働き方改革の一助となっている。

研修については、全教員が東京都教職員研修センター研修等の外部研修を受講した。校内研修では、「学習を自己調整し、主体的に学ぶ生徒の育成」～ICT活用と、共同学習を通して～を研究主題にして、教員がグループごとに研究授業と協議を行った。次年度は、全教員が研究授業を実施し、授業力向上に向けた研修を進める計画である。

特別支援教育コーディネーターを昨年度より3名体制にし、特別支援教育の充実を推進した。週1回の校内支援委員会には、SC、SSW、教育相談員などにも参加していただき、外部機関と連携しながら支援体制の充実、強化を図った。

開設4年目を迎えた不登校特例校7組は、課題を見付けて解決に取り組む作業を続け、個に応じた指導の充実を進めている。一人1台端末を活用し、学校や家庭でも進めることができる教材を開発し学習指導を行っている。また、時間割や課題などの情報発信を行うなど生徒一人一人とのつながりを大切にしている。生徒が不登校になる要因や背景は、一人一人異なり、複合化、多様化しているため、今後、特別支援を含めた個に応じた指導の更なる充実を図ることが課題である。

通常級と特別支援学級（知的固定学級8組、情緒固定学級9組）との交流では、特別支援学級の生徒が修学旅行実行委員や体育祭実行委員に加わり、集会では係担当として発言するなど生徒が活躍し、交流することができた。また、3学年では行事以外でも給食交流を行うなど、積極的に交流を進めている。今後も8組と9組の実態に応じた柔軟な対応を行っていく。

(6) 家庭・地域等との連携（信頼される学校）

「ふっさ文化の杜委員会」との連携により、広報活動や人権教育、キャリア教育、防災教育の充実を図ることができた。生徒は地域の一員である自覚を高めるとともに、地域の方々に活力を発信することができた。おやじの会では、12月にボランティア生徒（約100名）と一緒に落ち葉掃きを実施した。今後も「ふっさ文化の杜委員会」を軸として地域との連携を推進し、開かれた学校づくりに取り組んでいく。

小中連携については、一中、二小、三小の教員交流会を各学期1回実施し、分科会に分かれ、具体的な検討を行った。今年度は、児童会本部と生徒会本部による合同挨拶運動を各小学校で3回実施することができた。また、夏季休業中には科学部による小学生科学教室を、2月には、生徒会が本校で小学6年生に対して学校説明会を行った。今後、義務教育9年間終了時の、「期待する生徒の姿」の共有を進めていくことが課題である。

3 自己評価に対する改善策

(1) 学力向上

・確かな学力の向上及び主体的・対話的で深い学びの実現に向け、学習カード等を活用し粘り強く取り組む姿勢や自己調整力を育成する。また、授業で、話し合い場面を設定するなどし、協働的な学習を推進する。

・基礎・基本の確実な定着を図るために、一人1台端末を始めとするICTを活用した個別最適な学習、体験的な学習、補足的な学習等の充実を図る。

- ・校内研修で確かな学力の向上、及び、指導と評価の一体化に向けた更なる授業改善に取り組む。
- (2) 健全育成（道徳教育、生活指導・進路指導）
- ・人権教育の推進、道徳教育の充実を図り、生徒一人一人がかげがえのない存在であるとともに、違った個性や異なる価値観をもった他者であることを理解し、自他を尊重する態度を育成する。
 - ・「生徒指導提要」に基づく生徒理解、組織的な指導により、「いじめ」、「不登校」の未然防止、早期発見、早期対応等に取り組み、生徒が安全で安心した学校生活を送れるように努める。
 - ・生徒に寄り添いながら、自発的・主体的な成長を支える発達支持的指導の視点で、自ら考え責任をもって行動する指導、配慮のある指導を重視し、挨拶や時間等の生活習慣を身に付けさせる。
 - ・キャリア教育で身に付ける4つの基礎的・汎用的能力を育むために、3年間を見通した系統的な指導を推進し、社会的・職業的自立に向けて指導を行う。
- (3) 特色ある学校づくり（特別活動）
- ・生徒一人一人の主体性の向上とリーダーの育成を中核とした学級活動、生徒会活動、学校行事の企画・運営を行う。
- (4) 健康・体力づくり
- ・体育健康教育推進校としての成果を継承し、学校教育全体で生涯にわたってスポーツへの興味・関心を高めたり、運動への親しみをもたせたりすることで生徒の体力向上を図る。
- (5) 学校運営（特別支援教育を含む）
- ・ICT機器を活用した業務の更なる効率化、会議時間の短縮を進めるとともに、校務分掌の整理を進める。また、東京都教職員研修センター等の外部研修を活用し教員の指導力向上を図る。
 - ・校内支援委員会の更なる活性化を図り、関係機関等と連携した個別支援の充実を推進する。
 - ・不登校特例校分教室7組の教育活動の充実及び情報発信に努める。
 - ・特別支援学級と通常学級との生徒間交流を更に推進するとともに、教員間の支援・協力体制の構築を図り、インクルーシブ教育を推進する。
- (6) 家庭・地域等との連携（信頼される学校）
- ・「ふっさ文化の杜委員会」を核とした地域関係機関との連携により、地域防災活動、ボランティア活動、講話等を協働推進し、愛校心や社会貢献の意識を育むとともに、より一層の信頼関係を構築する。
 - ・一中学区の三校交流会や「ふっさっ子スタンダード」の活用等を通して、二小、三小と連携を図り、学力向上・生活指導・特別支援教育等に関する継続的な指導の実践を推進する。

4 学校関係者評価の総括

令和5年度、「ふっさ文化の杜委員会」（CS委員会）を年間5回実施し、学校運営の基本方針承認、本校の教育活動に関わる情報提供等を行うとともに、学校評価や学校運営等について意見を伺った。CS委員の意見及びアンケート等をまとめると以下のとおりである。

(1) 学力向上

・生徒には様々な特性や学び方がある。他の生徒とグループワークが好きな生徒もいれば、他の生徒と関わるのが苦手な生徒個人で学習を進めることが好きな生徒もいる。他の生徒と一緒に共同学習を行うことが嫌で不登校になることがないよう配慮してほしい。

・不登校生徒や、不登校特例校分教室（7組）にも登校できない生徒の中には、他の生徒と会うことが嫌だと思ふ生徒もいる。「誰一人取り残さない」の指針を大切に、その生徒たちの自己肯定感を高めたり、学習の機会を充実させることが必要である。

(2) 健全育成（道徳教育、生活指導・進路指導）

・登下校中に生徒から気持ちのよい挨拶をしてくれて、こちらも元気になります。

・職業講話で講師をさせていただきましたが、生徒は横を向いたりせず、みんな前を向いて真剣に話を聞いてくれていました。教員が生徒に上手に声をかけ、体験への興味を助長する働きかけをしていただきました。

・いじめについて、教育活動アンケートで「学校はいじめをなくす努力をしていると思う」の「分からない」と回答している割合が高い。「当てはまらない」の割合が低いので、学校からの発信方法を検討する必要がある。

・自発的に挨拶できない生徒が増えている。挨拶の大切さを教えたい。”

(3) 特色ある学校づくり（特別活動を含む）

・生徒が主体的に学校行事に取り組んでいる。

・体育祭、合唱コンクール等、生徒が主体的、自発的に活動できる環境を整えている。

(4) 家庭・地域等との連携（信頼される学校）

・PTA活動で漢検や英検を行っている。漢検は中学卒業程度が3級であるが、2級を取得した生徒もいてよく頑張っている。特別支援学級7組や8組の生徒も通常級の生徒と一緒に受検を重ね、自分のペースで1つ1つ級を上げ、合格している。

・三小のPTA祭りに中学生十数名がボランティアで参加してくれ、とても助かりました。

・児童館は、中学生の利用も多い。中学生と高校生の交流会を行い、高校の楽しさを中学生に伝えられたらと思います。

・福生市立中央図書館がリニューアルオープンし、中学生も自習に来ています。生徒によって、1階の一般閲覧室で学習する子もいれば、2階の静かな学習室で学習する子もいてそれぞれの学習スタイルがあると思います。

5 学校関係者評価に対する改善策

(1) 学力向上

・生徒一人一人の基礎・基本の定着と学習保障のために、生徒が主体的に学習に取り組む態度の育成と個別最適な学習の実現に向け、ICTを活用した授業改善を進める。

(2) 健全育成（道徳教育、生活指導・進路指導）

・基本的な生活習慣確立の一つとして自らすすんで挨拶ができる生徒の更なる育成を進める。

・いじめの予防、早期発見、早期対応は、学校と保護者が協力して取り組むことが重要であることからことから、学校便りやブログ、保護者会等で積極的に発信していく。

(3) 特色ある学校づくり（特別活動）

・生徒の自治活動の更なる活性化を図り、生徒会本部役員や各行事の実行委員会を中心とした企画や運営を通して、生徒の主体性を伸長する。

(4) 家庭・地域等との連携（信頼される学校）

・「ふっさの文化の杜委員会」を軸とした地域との更なる連携を強化するとともに、小学校との連携・協力を推進し、持続可能な地域に根ざした9年間の学びの実現を目指す。

6 総括的な学校評価

本校は、教育目標である「自立 共生 貢献」の具現化に向けて、「生徒一人一人を大切に、生徒を中心に据えた教育」を推進してきた。その結果、ここ数年、落ち着いた教育環境の中で、安定した学校生活を送ることができている。また、生徒会活動をはじめ、体育祭、合唱コンクールなどの行事も生徒実行委員を中心に生徒の主体性を育む機会として取り組んだ結果、学校全体に生徒の主体性を尊重する意識が育っている。生活指導については、今後も「生徒の主体性を育む指導」「考えさせる指導」「配慮のある指導」を重視するとともに、これまで大切にしてきた「社会生活に必要な資質・能力を身に付けさせる指導」との調和を図りながら、さらなる教育の質的向上を目指す。そのために、新たな視点からの方策を積極的に導入するとともに、良き手法は着実に踏襲し、組織を機能させ学校の総力を挙げて、教育活動を展開する必要がある。

一方、教職員は本校を初任校とする教諭が約3割を占め、全体として目前の課題に熱心に取り組もうとする姿勢が見られる反面、ミドルリーダー層が薄いため、多面的、長期的な視点が不足しがちになるという組織上の課題がある。引き続き、課題に即した実践的な校内外の研修により、職層に応じた教職員個々の指導力、総じて学校全体としての教育力の向上に取り組んでいく。また、運営委員会によるマネジメント機能を充実させ、組織体制及び組織的対応の強化と、関係機関との一層の連携を図る。

これらの取組を通じて「全ての教育活動において、一人の生徒を大切にする理念が貫かれ、実行する学校」「生徒一人一人の主体性が発揮され、生徒の豊かな人間性を開花させることができる学校」「専門性の高い教員の指導による良質な教育活動が提供され、生徒が学ぶ喜びを実感できる学校」「ふるさと福生に愛着と誇りをもち、活力を発信する学校」を目指していく。